

## アカデミックポストからの転向組コメント

(大学研究職から当事務所(はるか)に特許技術者として入所して、その後弁理士になった所員にインタビューしました。)

Q1 弁理士になって、研究者時代には感じなかったやりがい、または、弁理士になって良かったと思うことは何ですか？

どんなに優れた技術であっても特許で適切に保護されなければ、実際に世の中に出ることなく終わってしまうことが多いのが現状です。

そして適切な特許を取得するには技術と法律の両方の知識や経験が必要です。自分が担当する技術がどのような形で世の中に出るかを見据えながら、その技術の良いところを徹底的に探し、かつ法律要件に合うよう適切な文言で表現するという仕事は、技術と法律の両方を理解してこそできる、やりがいのある仕事だと思います。

また、様々な最先端技術に触れられること自体、純粋に楽しいです。弁理士の仕事はいつでもどこでもできるという点も気に入っています。

Q2 弁理士になって、研究者時代の経験が強みになっていると感じるのはどんな時ですか？

私が大学の研究者を志したのは、純粋に技術が好きだったことに加え、自分にしかできない仕事を自己責任でやるという独立性が自分に合っていたからです。

この姿勢は士業である弁理士でも非常に重要です。

また、先が見えない暗闇の中でも必ず何か見出せると信じてチャレンジするという研究者の姿勢も、世界中で熾烈な技術開発競争が行われている中、自分が担当する発明の従来にない特徴を粘り強く見出すという弁理士の仕事において非常に役立っています。

さらに、私は実験系の研究者だったので、法律要件を念頭に、特許をとるためにどのような実験を行えばよいかを提案できるという点もクライアントから評価いただいていると思います。

Q3 大学の研究者から、なぜはるかに転職したのですか？

また、当時、はるかに転職すること、知財業界に転向することに何か不安はありましたか？

私は医療技術系の大学研究者でしたが、当時は大学からも積極的に特許出願していくべきという考えが広まりつつあり、また、医療技術の特許の対象としてどう扱うべきかという点について特許庁と有識者との間で盛んに議論されていたころでした。そんな中、医療技術を理解できる弁理士は非常に少ないと聞きました。

そこで、自分自身が弁理士になって、様々な医療技術が世に出るための手伝いをするというのも、大学の一研究者ではできない、面白い仕事になるのではないかと考えました。

一方で、当時偶然に知り合いから紹介されたはるかは、設立されて半年程度で、主に電気・IT系の発明を扱っており、バイオはおろか化学系の仕事もまだないという状況でした。

しかし今後はバイオと電気・IT技術を融合した技術も出てくるだろうと思っていましたし、所長もこれから化学・バイオの仕事を獲得していけばいいという楽観主義だったので、自分にしかできない仕事ができるようになるために一からチャレンジするには寧ろ望ましい環境だと思いました。

新たに法律の勉強を始めなければならない点には不安もありましたが、既に多くの方が弁理士になっているので、やればなんとかなるだろうと思っていました。

収入面は、一から修業を始めるのでダウンは当然と覚悟していた一方、仕事ができるようになれば自ずと上がっていくだろうと思っていました。

実際、はるかに入って17年になりますが、自分の能力を高めるためにやりたいことは自由にやらせてもらえましたし、様々な技術分野に触れながら実務経験を積むことができ、おかげさまで良いクライアントにも恵まれ、自分にしかできないと思えるやりがいのある仕事できています。

Q4 たくさん特許事務所がありますが、その中でも、はるかはどんな事務所だと思いますか？

はるかは、技術について深く理解することが好きな方、自分にしかできない仕事ができるようになるためには努力を惜しまないという方、そして一定の実務能力を身につけたら自分の責任で自由に仕事をしたいという方に向いている事務所だと思います。

あなたもはるかで弁理士として働きませんか？ご興味をお持ちいただけましたら、ご遠慮なく、採用担当までご連絡ください。皆様のご応募をお待ちしております！！

特許業務法人はるか国際特許事務所 [recruit@harukapat.jp](mailto:recruit@harukapat.jp)

EAST オフィス(東京)採用担当:塚越 和音(03-6256-9947)

WEST オフィス(神戸)採用担当:竹沢 有加(078-392-3260)